

# 哲學研究

第二百四十七號

第二十一卷  
第十一冊

## 論理の社會存在論的構造

田邊元

一

種の論理といふものを考へなければならぬ、私にとつての最も重要な理由は、社會が單に個人  
の交互關係としては理解せられないといふことであつた。社會を一般に個人の交互關係として考へ  
るのは所謂形式社會學の立場であるから、右の理由は形式社會學の限界認定にあつたと云つてもよ  
い。今私は社會學の批判を行ふつもりではなく、又既に今日は形式社會學が昔日の權威を失墜して、  
殆ど誰もが原始的共同社會を社會の根源的なものと認める如き状態にあるのであるから、社會の  
形式社會學的理解について多くの言葉を費す必要はないと思ふ。たゞ此見地其ものが社會發生的に  
いへば自由主義の產物であり、個人主義の原子論的社會觀に外ならざること并注意すれば足りるで

あらう。併し私は決して此見地が單に否定排斥せられるべきもの、又否定排斥せられ能ふもの、であるとは考へない。却て反對に、一度歴史的に發現した以上は、其後の社會觀に契機として永久に保存せられなければならないものと思ふのである。社會は個人の交互關係として理解せられるべき側面を如何なる場合にも全然缺如することは出来ない。社會學が之を社會の缺く能はざる契機と認めるのは當然である。一の經驗科學として成立する爲めにそれが必然に分析的方法を用ゐ、其方法に此見地が對應することは論理の必然に屬する。たゞ私の強調せざるを得ないのは、斯かる個人の交互關係が此様に社會の不可缺なる契機であるにも拘らず、これのみを社會成立の原理とすることが出来ない、他の半面に全然これと否定的に對立し、如何にしても個人の關係に還元すること能はざる、却て個人を其内に埋没し之を消滅せしめる如き契機が無ければならぬ、それが個に對する種と呼ばれるべきものである、といふことである。社會は此様に否定的に對立する兩契機の媒介として成立するのであつて、その最も原始的なる形態は此兩契機が直接に合一するものであり、而もそれに於ては其直接性の故に必然に種が優勢であつて個は種に合一せしめられるのである。これがトテム氏族をその現實的なる型とする原始共同社會に外ならない。トエンニエスが實在意志に根ざすと考へた共同社會は、原始的なる型として此の如きものに相當すると解せられる。之をその優勢なる契機に従つて種的社會と云つても差支無からう。私が種と呼ぶのは此様に個を否定することを可

能とする個の根源である。それであるから、之を個人と個人との間柄の如きものに還元することは出来ない。間は決して項と否定的に對立するものではないからである。若し種が間と解せられる如きものであるならば、それは私の意味する種とは別のものでなければならぬ。間は數學に於て結合の公理に由り考へられる如く、既に個と個とを項として豫想した上でそれを結合する分析的見地を含むものであつて、項と否定的に對立するものではない。間が間である限りは項を埋没する如きものであることは出来ぬ。それは私の意味する種が個を埋没し吞盡する如きものであるのとは違ふ。尙又間は項と共に成立するものであるから、種が個の發生の根源であるといふ如き意味に於て、項の發生の根源であることは出来ない。間は何等か創造的といふ意味を本來もつものではないであらう。たゞ私から見れば、此の如き根源的なる種があつて、それが個と否定的に媒介せられた結果として間柄も可能となるのであるから、後者の成立にも前者が豫想せられるといはなければならぬのである。間は既に種が個と否定的に媒介せられ、直接的なる有としてのそれが無化せられた構成の産物であると思惟せられる。それであるから、個が優勢の地位に置かれた人格社會に於ても間は存続するのであつて、たゞ平等なる人格の場合にはその間は具體的なる間柄(例へば父子の如き)から無差別的形式的なるものに一般化せられるだけである。我と汝との交互關係が斯かる形式的平等的なる間の有する意味に外ならない。それが個と否定的に對立するどころではなく、却て反對に個を媒介と

して構成せられた無の場所的性格を有するものなることは明かであらう。或はまた斯かる無の場所に置換へるに、充たされた場所として環境の如きものを以てするとしても、それは私の意味する種とは全く別のものでなければならぬ。何となれば、環境は個體を限定する媒介者であると同時に個體に限定せられるものでもあるから、それは私の意味する種の、個に對する根源であると同時に個を否定し之を消滅せしむる媒介者たるとは異なるからである。例へば原始社會としての氏族とか部族とかいふ血縁共同體を、單に環境と解することは到底出来ない。それは環境の如く個體と交互的に限定し合ふものではなくして、寧ろ個體を吞盡し個體の個性を否定せんとする如き連續的全體であり、個體が其中から生まれ出る根源たるのだからである。斯かるものが私の意味する種である以上、それは勿論環境の如き概念を以て置換へることは出来ない譯である。いふまでもなく私は斯かる種が全然個に先だつて自存するといふのではない。初に明言した如く社會は如何なる段階に於ても常に斯かる種と個との媒介なのである。種を個の根源といふも、それは媒介關係に於ける意味に係はるのであつて、時間上の先後を謂ふのではない。併し社會の基體として必ず斯かる連續的全體がなければならぬのであり、而もその個に由る否定的媒介の初發の段階に於ては、個がそれと直接に合一するに由つて専ら種の原始的統一が主として社會の形態を規定する、従つて之を、既に個と媒介せられたものとしての、間柄とか環境とかいふ如きものを以て置換へることは許されない、

といふのが私の主張である。トエンニエスの實在意志は明かにショーペンハウアーの生命意志から由來するものと考へられるが、私は種の連續的全體性が正に生命の連續的全體性に外ならないと思ふのである。生物の個體は種としての生命を根源とし、而もそれに吞盡される如きものであることは、種族の爲めに無數の個體を犠牲にして顧みることなき生命意志の、所産として如何ともし難い。私の謂ふ所の種は此の如きものを意味するのである。無の媒介が非連續の連續であるに對して、有の連續的基體が連續の連續的契機たるのが種的全體である。それが個の根源的媒介でありながら而も個と否定的に對立するものとして、苟も個に依存する非獨立的概念で置換へられることを許さないのは當然でなければならぬ。私から見れば共同體の原始性を強調する見解の多くが、なほ依然として形式社會學の絆籠を脱しないのである。形式社會學の個人主義的原子論を非難するに拘らず自ら之を自己の立場とする場合が少なくない。形式社會學の見地は單に非難排斥せらるべきものでなくして、却て止揚せらるべきものである。併し其爲めには曖昧に之を取扱ひ却て自ら其絆籠に束縛せられる如きことを免れる爲めに、一たびこれと否定的に對立する如き種的全體を、明確に認めることが必要であるといふのが私の見解に外ならない。蓋し媒介とは夫々獨立的に對立する二つのものが、而もその存在に各々一が他を豫想する如き相即の關係に立つことを意味する。媒介の理解は却て具體的には、媒介せられるものの獨立性を確認するのでなければならぬ。私は、種と個と

の交互的媒介として成立する社會は、此兩契機を確認することに由つてのみ具體的に理解せられる、と思惟したのである。

此の如き種の契機の優勢にして個が直接にそれと合一する如き社會として、私はトテム社會を現實に存するその型と看做すのであるが、併し私は種其ものが直ちに社會の原型として原社會ともいふべきものを形造ると考へるのでは決してない。我々は社會の構造を明かにするに當り、單に論理的に概念を以て社會を構成することは出来ない。必ず歴史的に現存した或は現存する社會の構造を手引として之を了解し解釋することを必要とするのである。併し了解解釋のみで認識が成立するものではない。了解せられる形態はその契機の論理的關係を示す爲めに型化せられ、その可動的形態の契機の一方的昂揚と聯關の目的論的合理化とにより更に理念型にまで純粹化せられ、それによつて存在の解釋が、理念的に純化徹底せられた契機の對立否定媒介綜合の論理と、對立的に統一せられなければならぬ。論理はその否定契機として生命の了解解釋をもたなければ空虚に陥るけれども、同時に了解解釋も論理と對立的に統一せられなければ學的認識となることが出来ぬ。生命を單に狀態としてそれに同化するに止まらず、實踐として主體的に之を捉へる爲めには、論理を必要とするのである。解釋と論理とは互に否定的に媒介せられなければならぬ。これが生命と理性との相即の要求である。従つて歴史的に現存する社會の解釋と原社會の論理的構造とは同様に對立しな

がら相豫想し統一せられなければならぬ。單に現存社會の了解解釋から原社會なる社會の原型を構成することは出来ないのである。私はトテム社會を比較的に種的社會（それは併し種のみが原理となる社會でなく既に個と直接的に非媒介的に媒介せられたもの、即ち論理的に言つて媒介無き媒介、に相當すること上來繰返す如くである）に最も近きものとして掲げただけで、トテム社會を原社會と考へるのではない。必ずしもトテム的でなくとも血縁的氏族社會は、一般に種的社會に屬すると考へてよいと思ふのである。其故簡單に血縁社會といふ概念で種的社會を置換へても必ずしも不可ではない。今日屢々論議せられる如く全國民の血の純粹といふ如きことは假想に過ぎないこと否定出來ないであらう。併しそれは血の統一を種的社會と考へることの妨げにはならぬ。私は曾て種を種に對するものと言つたことがあるが、これは十分考が精密でなかつた結果である。此點を闡明することも實は此論文の目的の一つなのであるが、私は今、種は決して他の種に否定的に對立するものではなく、種と種との關係は對立の代に相違に止まらなければならぬと思ふのである。ところで單に相違するものは連續的に推移し、いくらでも中間に混合帯を挿むことが出来る。これが種の連續的全體たることの必然の結果である。連續的全體はその内部に向つていくら分割を進めても常にその部分がそれ自ら全體であることを本質とする。併し同時に種がその外に向つて他の種に對して有する關係も、また連續の見地から見れば同様でなければならぬ。従つて種と種と共に更に大

なる種（斯かる種を含む種を普通に類といふのであつて、此意味に於ては類と種とは相對的に區別せられるに過ぎない、私は斯かる類を相對的に種とは考へられない類と區別して、相對類とか類的種とか呼ぶ）に含まれ、一層大なる連續的全體の内に共存するのである。例へば色の連續態の中に種々の相違する色が並んで共存する如き關係を、比較にとることも出来るであらう。従つて實は何れの種も他の種と相違しながら連續的に推移するものとしては、既に他の種を多かれ少かれ其中に混入するといはなければならぬのであつて、絶對に純粹なる種といふものが單に極限に過ぎないのは當然である。血の統一も斯かる種として何等かの程度に不純粹であり混合であるのは怪しむに足らぬであらう。併しそれでは種に全然統一が無いかといへば、さういふことも亦事實に反するのは、例へば色が七色を種として區別せしめる如くである。血の種別も斯かる意味に於て實際存在するのであり、相違する種として血の統一が夫々に成立つのである。私は斯かる意味に於て種的社會を血緣的統一と考へることが許されると思ふ。もと民族の概念が社會學上非常に多義複雑なるものであることは、ノイマンやクノウの書などを一見すれば明かに知られる。併しそれが如何に複雑でありまたその統一の紐帶として文化的觀念的契機が如何に多くそれに入込むとしても、民族が其基體的核として民族を含み血緣社會を媒介としなければならぬことは否定せられないであらう。其意味に於て極一般的には種的社會を民族に配當して考へることも論理的に許されるかと私は考へたのであ



る。實際今日の國民主義の謂ふ所の國民とか民族とかいふものは、(縦ノイマンの問題とした兩者の相違が如何に解すべきであれ)個人に對立して否定的に之を吞盡さんとする性格を有すること、私の意味する種的社會に正しく該當する所があるといはなければなるまい。とにかく此様に、個に對しそれを否定する連續的全體としての種が、却て同時に個のそれから生まれ出る根源的媒介者として社會の基體たることを、私は必要視するのである。種は個を殺すと共に個を生む。その連續は血の連續の如く一方に於て推移的混合的であると共に他方に於て不斷である。種は我々の身體が個人の分界であるのに對し、其半面に此分界を否定して個を貫き、種的生命として之を包容し、その根源的媒介となる。それは個的分立の背後に基體的媒介として否定せられながら保存せられるのである。身體は先づ斯かる基體の連續を含むものとして種的に理解せられなければならない。然らざれば種といふも抽象的にして、具體的なる生命の基體たる意味を有することは出来ない。而して斯かる基體は論理の否定契機として始めて捉へられるものであつて、表現解釋の立場に現はれるものではない。解釋は個人の立場でないと言ふには考へられるけれども、併し曩に述べた如く無を媒介として結合せられた個の立場なのであつて、決して個を否定するものとしての種が其處に積極的に表現せられるものではない。却て表現に於ては斯かる種は基體として豫想せられながら否定せられ無化せられて、了解解釋には入込み得ないのである。それが或はバトスと呼ばれ、或は觀念的質料と解

せられるのも已むを得ない。併し斯かるものに還元せられない基體が無ければならないことは、表現が決して個の規定したものである。併し斯かるものとしては解釋出来ない種の規定を含むことに由つて知られる。斯かるものとしての種は了解解釋の立場に於てでなくそれと對立的に統一せらるゝ論理の立場に於て、個を否定する契機として捉へられるのである。單なる表現解釋の立場で具體的なる社會の集團性が理解せられない所以である。それは否定的媒介を本質とする論理を俟たなければならぬ。

右の如く種的基本體を以て個體の根源的媒介であると共に却てこれと否定的に對立するものであると考へることは、必然に其半面に於て個を種の否定的對立者とすることを要求する如く見える。現に私は斯く考へて、個の原理を種の連續的全體性を否定するものとしたのである。個は種を根源としながら却て自己の根源を否定し、自己自らに其根源を奪つてそれ自身全體の位置に立たんとする、此要求が、生命意志としての實在意志に對するトエンニエスの所謂選擇意志として、宛も權力意志ともいふべきものに相當し、それが個別化の原理になる、と考へたのである。一體シヨールペンハウアの意志哲學に於ける最大の困難は個體發生の原理であることは廣く認められる所である。彼は先づプラトンの形相を以て意志の質的差別に對する原理とし、更にそれが空間時間の個別化原理に由つて個體化せられると考へたのであるが、空間時間を單に表象の現象的規定に止まるとする彼の哲學に於て、それが個體の本質を限定する原理たる能はざることとは明かである。加之形相はブラ

トンに於ける如く一般者として個體化の原理たる能はざること既にプラトン哲學の難關であつた。或は之を個體にまで及ぼし、アリストテレスやプロティノスに於ける如く個體の形相を考へるとしても、なほそれが形相を特殊化した極限と考へられる限りは實は依然として一般者なのであつて、眞に一般者を否定する個體たることは出来ない。個體とは一般者を否定するものでなければならぬから、それは單に一般者から導かれるものではない。如何に一般者を特殊化してもその特殊自身依然として一般者たる限り個體には達せられない。個體化の原理は一般者の否定を意味するものでなければならぬ。其故形相を如何に特殊化して考へても、それで個別性を根據附けることは出来ない。斯く考へて私は、生命意志の連續的全體を否定して自ら全體の位置に立たんとする意志を、ニイチエに於けるとは寧ろ正反對の意味に於て權力意志と稱し、之をショーペンハウアーの生命意志に對立せしめて個の原理となし、以てトエンニエスの選擇意志を原理附けようと欲したのである。彼が選擇意志に由つて成立すると考へた利益社會は、斯かる個を以て種を否定し、種的共同社會に於て個が種に合一するのと反對に、種の統一力が個に由つて極度に稀薄にせられ、僅に利己本位の契約に於てその統一を維持するものと解せられる。是に由り私は種と個とを互に直接否定的に對立する契機と考へ、その兩契機の否定的媒介に由つて一般に社會の諸形態が成立すると解したのである。此考は私の見る所を以てすれば意外に多くの賛同を得た如くである。たゞ種の必要は認めても

私の如く之をトテム氏族と解し又それを民族の核とするには異論があるやうであり、尙種を階級と解せんとする主張が特に私の注意を惹いた。その前の方の異論に就いては、私は一に社會學の實證的研究の結果に従ふ以外に他意は無いのであつて、而も私の意味する所は既に前に觸れた如くである。然るに後の主張に對しては私は直ちに同意することが出来ない。何となれば私の意味する所の種は右に述べた如く否定的對立の關係でなくして相違の關係を以て他の種に對するものであるから、之を階級と解することを許さない。私の舊稿『社會存在の論理』に始めて種の論理を提説した際には、此點の考が十分精密でなく、種と種との對立を説いたので、或は斯かる解釋を喚起したものかと思ふけれども、元來私の意味する種は他の種に對してでなく個に對して否定的對立の關係に立つことをその論理的意味とするのであるから、その種が氏族にせよ民族にせよ所謂種の共同社會に於て個を否定埋没せんとする根源の原理たることを主眼とするのであつて、階級の如く個をそれに於て肯定する原理ではあり得ないのである。階級は寧ろ斯かる連續的全體を分裂せしめるものでなければならぬ。却て階級の分裂の爲めに原始的共同社會が豫想せられなければならぬことエンゲルス以來の定説ではないか。私の所謂種の社會を階級と解することは到底論理が之を許さないのである。併しそれにも拘らず、此階級の問題は私の所謂種の論理を一步具體化せしめる刺戟となつた。固より階級發生の問題は社會學と歴史學とに互る實證的研究を必要とするものであつて、私の専ら

關心を有する如き論理の立場から簡単に論議せられるべきものでないことはいふまでもない。ではあるけれども、種的社會が階級的に分裂すること、相互に否定的に對立し合ふ如き部分に分れること、が社會發展の過程に於て避けることの出来ない必然に屬するとするならば、此分裂對立の原理は論理的にも考へられなければならないといふのが、上にも述べた解釋と論理との對立的統一の立場の要求であること、縷説を須たずして明白なる筈である。私は種と種との關係を右の如く對立でなく相違として考へるのが正當であると氣附いたと同時に、種的社會の分裂對立の問題を階級發生の問題との聯關に於て注意せしめられ、更に此分裂對立と個との關係を如何に考ふべきかを、新なる論理の問題として受取らざるを得なかつた。今私は具體的に階級分裂の歴史の起原の問題に觸れる實證的知識の準備を缺く爲めに、直ちに此問題を茲に論ずることは出来ない。たゞ一般的に種的統一の分裂對立の問題を論理の立場から取上げ、それと個との關係を考へ直して見なければならぬと思ふのである。前に『社會存在の論理』といふ表題を舊稿に附したのに對し、此度は『論理の社會存在論的構造』といふ題名の下に此小論を公にするのも、此制限を明かにする爲めに外ならない。とにかく私にとつて、個體の原理を明にするには今迄考へて居た如く直接に種を否定するものといふだけでは不十分なることを、此種の統一の分裂對立の問題を通して氣附かしめられるに至つたことが、此小論を草する最も主要なる動機なのである。

## 二

前節に述べた種と個との交互否定の思想は初に注意した如く、私の場合には専ら社會存在の論理を闡明しようといふ要求から出たものであつた。併し同時に存在と論理との實踐に於ける媒介統一を信ずる私にとつては、社會存在の範疇が始めて論理の具體的なる理解を可能ならしめるものであるといふことも明白であつた。それで私は右の如き意味に於ける種を導入することに由つて始めて、其解釋が相當に重要な意味を有すると思はれるヘーゲルの論理に於ける判斷論を、正しく解するこゝとが出来たのではないかと考へたのである。周知の通りヘーゲルは概念の普遍が特殊化を媒介にして個物に至り、「個物は普遍である」といふ關係を成立せしめるのが判斷であると説く。ところで其場合所謂特殊化といふのは、普遍的なるものが漸次に特殊的に限定せられる過程を意味する如くに見える所から、個物は全く普遍に於て在るものとなり、それが或意味に於て普遍に對立して却て普遍に對する否定性をもちながら、絶對否定的にそれを止揚せられて、始めて具體的に普遍に統一せられるものとなる、といふ所謂辯證法的意味が十分顯揚せられない。併しヘーゲルに於ては、彼が國家に於ける個人の存在に就いて具體的に考へた如く、個は先づ直接的全體としての家族の如き特殊に否定的に對立して、兩者の止揚綜合に由り國家の如き普遍に統一せられるとするにあるのであるから、判斷の媒介となる特殊化も決して概念の普遍を形式論理的意味に於て外延的に限定すると

いふ意味であることが出来ないのは明かである。特殊は却て直接的なる種的全體を意味し、それと個との否定的對立が絶對否定の統一に止揚綜合せられたものが概念の普遍でなければならぬ。従つて特殊化とは、普遍の否定疎外を意味し、後者の絶對否定に對する直接否定を謂ふと解せられる。概念の普遍も既存の過去のものとしては却て個と否定的に對立する特殊に墮し、一方に於て個がそれに反抗しそれを否定せんと欲すると共に、他方に於てその普遍は宛も過去の社會的因習が個人の意志を否定埋没せんとする如く兩者互に相否定しようとする。それは個を自己の中に否定しながら肯定する普遍の意味を有するものでなく、單なる特殊に過ぎないのである。特殊が普遍の否定疎外を意味する所以である。これに對し眞の普遍は未來的に自己の意志を主張しようとする個とそれに對立する此過去の特殊とを否定的に媒介し、永遠の今といふべき現在に之を統一するものではない。それに於ては個は否定即肯定せられるのである。判斷は斯かる意味に於ける普遍としての概念が絶對否定的に個を活かし、個物はそれに於て個にして而も普遍の實現たる意味を有することを表はす。有名な「凡てのものは判斷である」といふ命題も斯かる判斷の構造に由つて理解せられる。其理解の鍵となる判斷の中核は、特殊が普遍の自己疎外として普遍に對立し、同時に個に對しても否定的對立の關係にあることである。特殊化の意味を正しく解するには普遍の否定契機としての種を取出し、それが個の根源的媒介たる直接的全體の意味を有すると同時に個を否定す

るものなるその矛盾性を明かにしなければならぬ。然るにヘーゲルは判斷論に於て此意味の種を特殊として掲げ、之を否定轉換の媒介として説くことをしなかつた。それが爲めに特殊は全く普遍の内に直接に含まるゝ如くに見え、その否定契機として普遍の疎外たる意味を十分に發揮しない。恰もヘーゲルに於て、自然の精神に對する疎外の否定性が稀薄に止まり、却て自然は精神の内から發生して常に精神の内部にのみ留まるかの如くに見えるのと一般である。普遍が絕對無でなく有であるやうになる傾向を有するのは、彼の辯證法の不徹底を示すものに外ならない。此點を誤解ならしむる爲めには、特殊が普遍に對する疎外の否定契機として同時に個と否定的に對立することを、特殊としての種の導入により明かにすべきである、といふのが私の考であつた。論理と社會存在との統一を意圖する私の着眼がヘーゲルの論理學と法哲學との媒介に向けられたことは、當然の事と私は自ら信じたのである。

併しながら右の如き思想は所詮私の未熟に歸する外無いことが、次の如くにして私自身にとり明かにせられた。それは個が直接に種と否定的對立をなすと考へることの困難に原因する。成程個は前節に述べた如く到底種から導くことの出来ない、本來的に種と否定的對立をなすものでなければならぬのである。併し今述べた如く個は普遍に止揚綜合せられて「個物は普遍である」といはれるのであつて、それが種と否定的に對立することは、普遍が一面に於て種と否定的に對立すること



に媒介せられるのである。若しさうでなく個が直接的に種と對立し、それ自身種の如く直接的なるものであるならば、如何にして既述の如く個が否定の統一たることが出来るであらうか。個體化の原理が、自己の直接的なる本質を否定して而も依然たる自己であるといふ自由創造的統一にあるならば、個は明かに矛盾の統一でなければならぬのであつて、その否定せられる本質は單にその根源的媒介たるに止まらず同時に自己の内に自己否定を含みその矛盾を止揚する絶対否定的なるものでなければならぬ。即ちそれは既に否定的に媒介せられたる普遍であることを必要とする。單に直接的なるものが個であることは出来ない。直接的なるものは縦個に對するものとしての種といふ自覺が無くても、否定的に媒介せられたものとしての個に對し直接的なるものといふその意味に於て、實は種であるより外無いのである。個は既に媒介せられたものなるが故に、それは同時に普遍を實現するものであり、其意味に於て普遍たるのである。「個物は普遍である」とは其謂に外ならない。單に直接的なるものとして個は考へられるものでないこと、曩にも觸れた希臘存在論の形相説が個體の形相に惱んだ跡が實證する。形相はそれ自體に於て存する眞實の存在として否定に媒介せられたものでなく、其意味に於て直接の存在である。それであるから斯かるものを縦最低種を超えて個體にまで推及ぼすとしても、實はそれが直接存在である限り否定の媒介を含む個には達しないのであつて、依然たる種に止まること、形相の語が種相を意味する如くである。否定の媒介を含ま

ない直接的なる存在は如何にそれが特殊的に限定せられても、常に特殊に止まり個とはならない。其故個を種の否定として考へようとしても、個が直接に定立せられるものでない以上、直接に種を否定するものとして之を定立することは出来ない譯である。直接に定立せられるものは種に外ならない。然るに他方から考へると、種が否定せられることは必然である。若し種が否定せられないならば、之を媒介とする普遍は不可能であり、同時に普遍に於て成立する個も不可能とならざるを得ないからである。これは論理の否定であり思惟の斷念たる外無い。斯くて種の定立といふも全く直接的なる感性的直觀に歸し、思惟の契機たる意味をもつものではなくなる。それは最早認識に屬することは出来ないから、それに就いて語りそれを種と規定することも不可能でなければならぬ。然るに我々はそれを種と考へ之を個と普遍とに對立せしめるのであるから、それは必ずそれを否定する原理をもつのでなければならぬのである。それでは種を否定するものは何であらうか。

今見た如く種を否定するものは、直接的なるものとしての個であることは出来ない。直接的なるものは一般に種である外ないのである。然るに今現に要求せられて居るのは種を否定するものに外ならない。然らば事態は、種が種を否定するといふことより以外のものであることは出来ない筈である。換言すれば種を否定するものも種そのものなのであつて種以外のものではあり得ないと言はなければならぬ。即ちそれは、種の自己否定に外ならない。種の外に直接に個といふ如き原理が對

立することに由つて種の否定が起るのでなく、種の自己否定が種の否定に對する原理なのである。種は自己の外にそれを否定するものを有するのでなくそれ自身の内にそれを否定するものをもつのである。此自己否定は更にそれ以上に之を原理附けるものを有しない。全く種に固有なる種の自己否定なのである。種が特殊であつて普遍でないのも、それが單に自己否定的であつて、絶對否定的でないからである。普遍の特殊化が、普通の自己疎外を意味するのも、絶對否定が自己否定に墮することを謂ふに外ならない。併し若し此自己否定が無ければ種が種として語られることもなく、その存在も認識せられない。既に認識し、就いて語る、といふことが直接的なるものの否定、反對を豫想する。種の自己否定はたゞ斯かるものとして承認せられる外無きものでなければならぬ。我々は種を否定するものとして個を考へる代りに種の自己否定をそれより以前のものとして考へなければならぬのである。個は此様な種の自己否定に媒介せられたものである。私は曩に種が個と否定的に對立しながら同時に個の根源であることを述べた。果して然らば個は種の内部から出るものと考へられなければならぬ筈である。併し其様に自己を否定する個を自己の内部から生むならば種は其意味に於て自己を自發的に否定するといはれなければならぬであらう。其故假に個が種を否定するといふ命題が正しかつたとしても、種は依然として自己を否定することに變りは無いのである。たゞ種の自己否定と個の被媒介性との關係が、其様な考では正確に解せられないことに氣附い

たので、今私は個が種を直接に否定するといふ命題を抹殺し、種を否定するものは個でなく種自身であり、種の此様な自己否定が却て個を媒介すると主張しなければならぬのである。それに由つて始めて辯證法の要求する存在の自己否定性が貫通する譯であつて、種の外に豫め獨立する個を想定し、それが種を否定するとするならば、自己否定の構造は未だ徹底せられない道理である。且それは個が種を生成の根源にもつといふ要求とも矛盾することを免れない。私の以前の考は斯かる不正確と矛盾とを含んだことを今私は告白しなければならぬ。種の自己否定は個を媒介するものであるけれども、それ自身個と稱せられ得べきものではなかつたのである。直接の連續的全體たる種は自己自身を否定するものであつて、それが論理の豫想であり、存在の論理性従つて可認識性の前提たるのである。私が前に階級の發生に聯關して問題を氣附かせられたと言つた分裂對立の原理は、此自己否定性に歸する外無きことを私は今や確認しなければならぬ。種は個に由つて否定せられるより前に既にそれ自身に由つて自己否定せられて分裂に陥ること、恰も共同社會が階級分裂に入り其統一を失ふ如くである。階級分裂の由來が如何なるものであるかは前にも言つた通り實證的研究に俟つ外無いが、とにかく階級分裂或はこれに比せらるべき分裂對立が種の自己否定性を最後の原理とするものなることは承認せられなければならぬと思ふ。種そのものは階級の如く直ちに他の種と否定的に對立するものではない。種と種との關係は對立でなく相違である。極めて大體の比較を假用

すれば、民族と民族とはそれ自身否定的に對立するのではないといふことも、是に由つて推定せられるであらう。否定的對立は種自身の自己分裂に由るのである。種が種として相互否定的に對立並存するのでなく、對立分裂は種の内部に起ると考へねばならぬ。種の對立は外延的でなく内包的である。我々は種の自己否定に由る此様な分裂を原始的なる辯證法として承認する外無い。

それでは種の自己否定と個との關係は如何なるものと考へられるべきであらうか。前者が後者の媒介となるのは如何にしてであるか。此問題に答へ得る爲めには、それに先だつて種の構造が一層立入つて闡明せられることを必要とする。先づ種が右の如く本來自己否定性をその本質に含むとするならば、我々が従來種を連續的全體として原始的統一性をもつものであると考へた思想は、少からず重要な制限を加へられ訂正を受けなければならぬであらう。何となれば種は自己否定の原理に由り分裂することをその本質とするものである以上、その全體の如何なる部分をとつて見ても必ず肯定的と否定的との力の抗爭が含まれ、此抗爭に由るその否定の對立への分裂と之に反對する全體の統一性が必ず相伴ふものだからである。種は全く相反對する力の對立抗爭に由つて常に分裂しようとしながら而も反對にその分裂に對立して統一を保たうとする力のはたらく、二重の對立性を含む所の不斷の運動であつて、決して單に靜止する固定的統一とは考へられない。それが如何に分割するもそれに由つて生ずる部分が依然として全體であり、無限に分割を進めることを許

すのも、此様な二重の力の對立を含むものだからである。力はヘーゲルがフェノメノロジーに於て悟性の對象として力の交互性を説く場合に極めて明瞭に其本質を示した如く、常に反對と伴ひ互に否定し合ひながら、却て反對力と相伴ふことに由つてのみ現實となる所の、對立否定の直接なる統一であるから、飽くまで交互的循環的であつて、之を如何に分割するも決して此交互的循環としての統一を失はしめることが出来ない。これが種の無限可分性の根據となるのであつて、連續の統一が空間の幾何學的構造に屬するものでなく力學的構造に屬するものと考へられなければならぬ所以である。(拙稿『種の論理と世界圖式』參照)。例へば引力と斥力、壓力と張力との如き交互態は、それが力のはたらく状態に保たれる限り、相反對する原動と反動とへの力が互に否定し合ひながら而も相兩立し共存するのであつて、若し一方が他方を否定し盡せば最早力のはたらくきは消滅し單なる運動が起るのである。而もまた斯様に共存するものが互に否定し合ひ相反對するのでなければ力は消失する。斯かる否定的對立と兩立共存との直接なる統一であるから、それは運動の生起が無い限り即ち力の交互作用の均衡が破れない限り、表面上何等の變化が現はれないけれども、それにも拘らず、力のはたらくき合ふ空間即ち力の場は、常に極微的假想的アイデユエルなる運動の絶えず間斷なく無限に生起せんとしては抑壓せられる激動の直接統一なのである。プラトンは質料を錯動原因と呼んだが(Platon, Timaios. St. 48)、實に力の場は錯動原因の互に活動し抑壓し合ふ場所なのである。物理

學者が數學的にテンソル量として力の場を、相反對し合ふ量の交互性の統一として考へようとしたのもこれが爲めであらう。普通にはベクトルが方向量として、幾何學的空間ならぬ物理學的空間の要素と考へられて居る。併しながらベクトルは大きさと方向とを統一するに止まるから、それは單に運動を記述するに役立つ量たるに過ぎない。之を以て物理學の建設に足れりとなすのは十八世紀的機械觀の見地に止まるものである。十九世紀以後の力學觀に對應する物理學的量としてはテンソルを必要とする。勿論解析數學の立場から分析的に力の場を記述するには必ずしもテンソルを用ゐなくても濟むこと、恰も運動の記述に必ずしもベクトルを用ゐなくても解析幾何學の座標を表はす數で足りる如くである。併しながら一層精細に考へると、實は座標なるものが最早單なる數の複合としては思惟せられないのであつて、互に或角例へば普通には直角に於て相交はる座標軸を考へるといふことが、既に方向量としてのベクトルを考へることに外ならないことは容易に氣附かれる。角といふものは最早數の範圍では十分具體的に考へられぬものではないか。空間が角の表はす方向を含むことが、計量幾何學を運動の群論と解釋せしめる理由となるのであらう。幾何學的空間は其意味に於て既に運動學的であり、ベクトルを要素とするのである。之を數の關係に還元することが出来るのは、分析的要素的構成と對應せしめられる限りに於てといふだけで、其構造の原理が單に點集合の原理に由つて十分盡されるといふことではない。それと同様な意味に於てテンソ

ルも所謂高次方向量としてヴェクトルの複合に歸せられる如く見えるでもあらう。何となれば、力もその現はす効果としての運動に着眼し、後者を以て前者を表現することが出来る筈だからである。力學が主として運動の記述と考へられる所以も其處にある。併し單なる運動に置換へられてしまへば力の場の交互作用性は見失はれざるを得ない。之を假想的運動の複合關係に還元するも、却て假想せられた運動が假想に止まり現實となることが出来ない理由となる所の、反對の力が偶然的でなくして必然的に一の力に同伴するといふ交互性は、到底十分理解することは出来ない。斯くて力を運動に還元し、テンソルをヴェクトルの複合に歸するのは、數學的分析的見地にとつて可能であり乃至必然であるとしても、それは力のテンソルの統一の特色を消滅せしめるものでなく却て實は之を豫想するものなること、運動のヴェクトルと點集合との關係に於けると同様なることが認められなければならぬ。テンソル場は正反對なるヴェクトルの複合に由つて解析的に理解せられても、それのもつ構造の底に潜む、運動に對する衝動性抑止性ともいふべき性格までをもヴェクトル化するとは出来ない。而も却て假想的運動の可能は此性格に基くのである。テンソル場は却てヴェクトル場の如く運動の複合であるのでなくして運動の消滅たることを特色とする。併しそれは運動學的でないそれ以前の幾何學的空間に歸るのでなく、却て反對に運動を其處から産出することの出来る運動學的空間の根源に遡るのである。運動が無いのではなく、無限の運動が湧き立つ爲めに動かん



としつゝ動かれない運動の發起抑止の根源を表はすのである。運動を否定し消滅せしめるものも運動であるといふ意味に於て運動の消滅は却て運動の生起に外ならない。生起と消滅との交錯の直接なる統一がテンソル場の構造なのである。ヴェクトルは具體的には其處に於て發生する。數學的にヴェクトルにテンソルを乗じて、方向と大きさとの異なる他のヴェクトルに之を變換する操作と考へられるものは、物理學的には、場の伸展凝収に由り、運動の發動を促進し抑止する力の對立の分裂と統一との交錯に歸せられる。萬有引力の場の相對性理論がテンソル解析を用ゐる理由も、是に由つて理解せられるであらう。種は斯かる意味に於て力學的でありテンソル的であるといふことが出来るのである。

併し其様に種が力の交互作用の無限なる重疊であるとするならば、種は互に否定し合ふものとして、前に私が種と種との關係を否定的對立でなくして相違であると言つたことに反し、私の棄却した舊説を再び主張しなければならぬ結果を導きはしないであらうか。若しさうであつたならば、種は本質上否定的に對立するのではなく單に相違しつゝ並存する民族の如きものでなくして、矢張階級の如く否定的に對立するものになるべきではないか。斯くして此問題は番に種の論理の一般の見地にとつてのみならず、具體的に社會存在論の見地からも重要な意味を有するものとなるであらう。抑も種の自己否定といふことと種が種に否定的に對立するといふこととは、如何なる相違を有する

のであらうか。それは形式的に考へて一見同一に歸するではないか。併し私は今述べた種のテンソルの構造を綿密に考慮するならば、此疑問は容易に解くことが出来るものではないかと思ふ。成程形式的に解するならば、種の自己否定といふことは既に我々の此概念に到達した過程に於ても使つた如く、種が種を否定するといふ語に由つて言表はされるものなること否定出来ないであらう、併しそれにも拘らず種の自己否定と種の種に對する否定的對立とが全然同一に歸するとはいはれない。何となれば、權に種の自己否定は種の種を否定することに相違ないが、さりとて種の種に對する否定的對立が必ず種の自己に對する否定であるとはいはれないからである。種の自己否定を種の種に對する否定と解釋する場合には、否定する種と否定せられる種とは本來同一の種でなければならぬ。然らざれば種の自己否定といふことは出来ない筈である。然るにたゞ種が種に否定的に對立するといふ場合には、否定する種と否定せられる種とは同一の種であることを意味しないどころか、寧ろそれは相異なる種であることが普通であるのは、對立といふ語に由つても示される。勿論我々は自己分裂に於て自己が自己に否定的に對立するといふこともいはれるであらう。併し斯く自己が自己に對立するのは自己分裂であつて自己の喪失である。自己は統一をもつ限り自己なのであるから、自己の統一が失はるゝ如くに分裂して自己が自己に對立するならば、それは自己が無いといふに同じい。それが自己の分裂と呼ばれ、自己が自己に對立するとして相對立する自己が共に自己と名けられる

のは、猶自己の統一が何等かの程度に於て殘存するからである。自己の統一が飽くまで自己の分裂に張合ふ限り自己といふべきものがあるのである。其場合には、分裂的に對立する對立者相互の對立と、その對立に張合ふ統一と對立との、二重の對立が猶直接なる動的緊張を保つのである。然るに種が種に否定的に對立するといふ場合には、形式的には種が同じ概念を意味するけれども其内容は異なることが普通なのである。同一の種といふ語で呼ぶ我々に對しては概念の同一性が存するけれども、種そのものにとつて自己の同一性を自覺することは要求せられない。赤が青と對立しても色の種が種に對するのである。此時兩種の色が互に一は他を否定するといふことは直ちにはいはいないのである。我々が種と種との關係を以て否定的對立でなく相違であるといふのは、色の種が相對立する如き場合にその對立關係は相違であつて否定的ではない、雙方が兩立共存するのであつて、一が他を否定し絶滅せんとする如きものではないことを意味するのである。併し若し赤の色と青の色との交代する變化といふ如きものを考へるならば、最早兩種の色は並立共存することは出来ないものであつて、此場合には一の色は他の色に否定的に對立するといはれなければならぬ。併し斯かる變化が種の自己否定であるとは勿論いはれない。一の色が他の色に變化するのは同一場所に就いては否定的對立であつても、相異なる場所に並存する二つの色が廻轉する圓盤の半分づゝを彩るものとして相互に交代する裝置が可能だからである。此時否定をなさしむるものは種の外にある裝置であ

つて、一を否定する他も一の外に並立共存するのである。一般に種が種に否定的に對立するといふのは、此様に外的に並び存する相異なる二つの種が何等か兩立せざる關係に入込む場合に、其關係に於て互に否定し合ふことを意味するのである。私は斯かるものを曩に外延的對立と呼んだ。それは同一なる種が自己自身の内部から自己を否定し自己を分裂せしめる内包的對立性とは構造上區別せられる。ところで種が自己否定を本質とし、無限なる反對とその抑壓との二重の否定的對立性の重積であるとしたならば、一見種の内部に於て相異なる種と種とが否定し合ふ如くに見えるでもあらう。併し此場合に重要なのは、若し互に否定し合ふものが相異なる種であつてそれが一の種の内部に對立的に並存するならば、兩種を其内部に含む一の種は類的性格を現はし、恰も赤と青とに對する色といふ如きものとなり、同一の種が自己否定をなすとはいひ難いことである。赤と青との何れとも限定せられずして而も何れでもあり得る如き種類的類としての色は、例へば音の如き異なる種類的に對して相違の關係を有するものとして種の性格をもつとしても、自己の内部に赤と青との異種を共存せしめる限り類的であつて、種が種として自己否定をなすといふことにはならぬ。寧ろ赤自身が自己の兩立し難き青を自己の内部から發展せしめ、又青が自己の否定者としての赤を自己の内部から産出するといふ如き事態にして、始めて自己否定的といふことが出来るであらう。併し其様に一を否定する他が一の内部から發生してそれが一に更はるならば、其事態は變化であつて、一の

種に他の種が代はるに止まり、種がテンソルの構造を有するといふことにはならぬ。それは單にヴェクトルの運動的といふに止まる。種がテンソルの力學的構造を有する爲めには、その自己否定をなす媒介となるものが、飽くまで依然たる當該種そのものとしてその外に離れ出ることなくそれと統一せられるのでなければならぬ。即ち否定的なるものも其種自身としてその對立が種の統一に禁壓せらるといふ二重の對立性に於て有るのでなければならぬ。従つて種の統一は種の自己否定に由り自己の内部に無限の層をなして自己とその否定者との交互的緊張を張渡し、横に自己と其否定との對立する均衡を、縦に自己自身の内部に無限の層を成して重ね合はせる如き構造をもつと云つてよい。數學的にテンソルが行列式からの發展として考へられる意味をもつのも此構造に由つて其根據を或程度まで理解し得られはしないか。とにかくテンソルの二次元的伸展凝收の力的緊張は、變化運動の一次元的ヴェクトルの構造に對し明瞭に區別せられなければならぬ。是れに由りそれが運動の無限なる重疊を却て靜止の緊張に湛へ、極微的に運動の湧立ち張合ふ根源たるのである。シェリングが『人間の自由の本質に就いて』の論文に於て、プラトンのテイマイオス篇の質料を狂瀾怒濤の大海に比した其比喻の正確なる意味は、此の如きものでなければならぬ。斯かる種の激動的自己否定態に於ても、勿論分析的外延的に考へれば一の種を否定するものはその種に對する他でなければならぬ。自己否定に於ける否定者といへども、單なる否定者といふ一般的概念ではなくし

て特定の積極的内容をもつ種そのものでなければならぬ。たゞその他たる種がその否定すべき一の種の外に外延的に並存するのでなくして一の種の内部から内包的に湧出し、而もその否定的對立性が依然として一の種の統一に壓へられ、その内部に保たれに由つて、他の種が他にして而も一に歸し一の種と内面的に繋がるのである。相違する二つの種が連續する場合に、一つの種の外に他の種が並存するのでなく一の種が他の種に入込み他の種が一の種から滲出すること、ベルグソンの純粹持續の構造に比すべきものがあるとすれば、その所謂相互貫入の統一は即ち種の自己否定の構造に外ならぬ。従つてまた變化の概念も普通に解せられる如く一の種の後に他の種が代つて現れる繼起の關係を意味するのでなく、ベルグソンの謂ふ變化の意識の如き變化そのものの動的統一を意味するとするならば、それは種の自己否定の一面を示すと解せられる。たゞ種の自己否定に於ては一の方向に於ける變化は他の方向に於ける變化と互に否定し合ひ、變化そのものが同時に變化の底から壓へられ、變化と不變とが張合ふのである。種の統一の内部に否定的對立が湛へられるのであるから、否定せられる種と否定する種が依然として同一の種であり、その同一種の内部に於て兩者が交互的に張合ふのでなければならぬ。變化そのものが動かんとして同時に逆轉せられ、變化と不變との動的緊張が保たれる。大海の波浪は寄せては返す反對運動が相重疊するに由つて、海水の分子そのものは流れ去るのでなく同一の場所で起伏の運動をなすといはれる如く、種の自己否定の

激動は變化をも不變と張合はせる動的緊張である。従つてそれは變化を自己の内に湛へながら同時に變化しない相違性の内的連續的統一と解せられる。斯くして相違は外的の否定的對立と相容れない關係であるに拘らず、自己否定の内面的統一とは兩立するものと考へられる。種が種に對し否定的對立の關係でなく相違の關係にあるといふことは、その相違を貫く連續の統一を考へることによつて、種の自己否定と媒介せられるであらう。方の場は場所毎に方の方向を異にし各部分が互に相違しながら連續する。寧ろ相違は連續の抽象であり、連續の否定契機であるといふべきである。何となれば相違を内に含むことなくしては連續は考へられないからである。

### 三

古代哲學に於ける質料の動亂激動の場所に比すべき私の意味する所の種は、その構造を論理的に性格附けるとき、種の自己否定性に因る、その分裂的對立と其對立が原統一に張合ふテンソルの二重對立性、といふべきものである、といふのが前節の所論の結果である。然らばこれに對する個の性格とそれの種に對する關係とは如何に考ふべきであらうか。個は曩に注意した如く、私が舊説に於て考へたやうな種の直接なる否定者ではなくして、種の自己否定に由り媒介せられたものでなければならぬ。直接に種と否定的に對立するのは個でなくして、種自身の自己否定的契機である。個は此様な種の自己否定を媒介とするのである。換言すれば、種とその否定との對立の統一とい

ふべきものが個と考へられる。種のテンソル的立場は前に述べた如く、如何に之を小さく分割してもその二重性的構造を失ふことがない。これが種の特徴たる無限可分性であり連續的全體性である。其故に斯かる分割に由つて不可分者としての個に達することは出来ぬ。個は種の分割に由つて現はれるのでなく種の否定的統一として現はれるのである。種の自己否定の自己内還歸といふべきものが個である。其故個は種の自己否定を通して自己の絶對否定的肯定性の統一を自覺したものといはれる。それは常に自己の内部に自己の否定を含み、自己の無に由つて却て自己の有に達せる矛盾の統一である。その有の内容を成すのは、種の二重對立の動的緊張がその含む所の否定對立の全體を自由に發展せしめ、それに由つて契機たる諸力の活動が凡て肯定せられ、而も却てその肯定が諸力の交互否定を惹起するが故に、其極凡ての直接的なる力が否定せられ、其絶對否定が即肯定として諸力を超ゆる其統一を以てそれ等を凡て媒介したものに外ならない。斯くて種の直接的なる連續的全體が自己否定の動的緊張として二重對立の張合であつたのが、秩序ある均衡的運動として一定の方向にはたらく力の合成的統一として現はれる。宛も自己否定的種の激動が全く無秩序なる所謂錯動原因の重疊であつたのが、その統計的效果として大量法則的なる因果の秩序を示すに比せられる。たゞ力學の統計性は數學的分析的合理化を媒介として數量化せられ、力の合成秩序も數學的にはヴェクトルの機械論化を受けるから、具體的なる力の絶對否定的轉換に由る秩序がこれに由



つて示されることが出来ない、のは是非も無い。併し種に於ける自己否定の爲めに種がプラトンの質料の非有と呼ばれた意味に於て非有であつたのが、個に於て無即有として有に轉せられるのは、今迄自己否定の爲めに假想的極微に止まつた力のはたらきが有限態に於て現實化せられるのに比せられる。其際現はれる力のはたらきは全體の力の特定なる秩序に於ける合成と考へられるといふヴエクトル場の構造は、移して種の個に於ける現實化の理解の鍵たらしめられるであらう。或は數學の群が如何なるその要素を二つ結合しても其合成の結果に相當するものが或第三の要素として見出される如き要素の集合である如くに、種の對立的構造に屬した力の二つづつの合成が常に其種に屬し、斯くして全體の力の合成の結果も亦一つの力として現はれるといふ構造が、個に於ける種の實現に含まれるのである。種の自己否定が絶対否定に轉せられて肯定となり現實化せられる無即有の内容も、種の契機として否定的に含まれた或極微的の力に外ならないのである。併しそれは最初の種の統一が、其統一を破り均衡を破壊して獨りはたらきを現はす力に由つて否定せられるのとは違ふ。斯かる仕方にて種の統一を直接的に否定する所の個が不可能であるといふことが、辯證法の要求する媒介性に外ならない。此様な直接的なるものは媒介せられたものとして始めて實存する個ではあり得ないのである。若しさうであつたならば、種のもつテンソルの二重對立性に由る非有的性格も是に由つて失はれる外無い。斯くして種が個の根源であるといふことも出来なくなり、種

は非有的質料にして有は常に個としてのみ存在することが出来る、といふ個體存在論の要求も満足せられないことになる。併しながら翻つて考へると、種が若し自己否定的質料として個の成立に直接に豫想せられるに止まるならば、それは如何に自己否定の故を以て非有と考へられるとしても、なほ非有なる有として直接に存在する有とならなければならぬではないか。これは明白に絶對媒介性の否定に外なるまい。かのプラトンのソフィステス篇の主題たる「非有が有る」といふ辯證法の成立する爲めには、所謂「類の共同」に由つて非有と有とが媒介せられなければならなかつた。種の非有は非有なる有として存在するのではなくして、非有にして有と媒介せられ、有と非有とが共同性交互性に入ることではなければならぬ。それは右に述べた如く非有としての種の自己否定性が絶對否定性に轉せられ、その肯定的内容が種の契機たる特定の力のはたらきに對應せしめられ等値と認められることに由つて可能にせられる。斯くて種が個の根源として個に於て實現せられると同時に、種が既に當該個に相應する力的契機に媒介せられたものとして、決して單に根源として無媒介に個の前に豫想せられるのではないことになる。其意味に於て種が個を媒介する如く個もまた種を媒介するといはれる。之を一應、前の媒介は即自的であり、後の媒介は對自的である、と云つてもよからう。個は種の媒介契機としては種の自己否定的構造に由つて否定せられ、而も種の自己否定の絶對否定的肯定的轉換に由つては肯定せられるのである。即ち否定即肯定であり無即有である。併しそ

れと同時に種も亦有即無、肯定即否定の絶對否定態たるのであつて、それに由り種と個とが互に媒介せられ、従つて種即個、個即種、となる。即ち今即自的なる媒介として、對自的なる媒介と區別したのも、媒介の交互性に由り、凡て即自且對自的なる媒介に轉ずる。斯かる媒介的統一が私の前に絶對的類と稱したものに外ならない。それは、種がその契機たる個々の力の各に於て自己を實現しながら、而も斯かる個を同一なる種の根源から發生するものとして全體の内に統一する媒介態を意味したのである。種的民族と個人との否定的媒介たる綜合態として考へられる所の國家が、これに相當するといふのが私の解釋であつた。

併しながら既に種と個との關係を右の如く考へ直した以上は、斯様な類もまた其構造を再検討せられなければならぬことはいふまでもない。私は更に一層立入つて之を考へて見なければならぬ。抑も個は、種に於てそれに相當する契機の、全體に於ける交互的否定に由り否定せられた結果が、絶對否定的肯定に轉せられたものに外ならないとするならば、個は常に自己の否定を媒介とし、従つて宛も數學に於ける群が、順逆の要素の結合の結果に相當する要素を含む統一たるは所謂自同要素を樞軸とするに由る如く、否定が肯定に轉せられ無と有とが媒介せられる轉換の原理を豫想しなければならぬ筈である。群に於ては如何なる二つの要素の結合も必ず一の要素に相當し、従つて何れの要素も自同要素を含む要素の全體の、種々の組合せに於ける二つの要素の結合の結果に相當する

ものと考へられるが、勿論斯かる結合の結果に相當すると考へられる場合と直接に一の要素として取上げられた場合との間に何等の區別はない。従つて斯かる結合を原理として成立する群の樞軸となる所の自同要素も、所謂自同的に止まり、之を如何なる他の要素に結合しても其結果は他の要素を同一に保ち何等の變化を惹起さないものと定義せられるのである。併しながら如何なる契機も決して全體を全く同一に止まらしめるものでなく必ず全體の構造にその痕跡を残す如き、精神や生命は勿論、物質のやうな具體的存在に於ては、必ず轉換媒介の原理は單なる契機に實現し盡されるものでなく必ずその全體を超える所の超越的普遍の統一性として把握せられなければならない。所謂普遍とは普通に考へられる如く相違する種を包攝する類の普遍ではなくして、有と無との相即的具體的同一、肯定と否定との矛盾對立の轉換的媒介統一を意味するのでなければならぬ。所謂絕對無とか空とか謂はれるものの統一性が辯證法的普遍の意味である。それは矛盾の統一なるが故に單に有として存在として思惟せられるものでない。而も却てそれが有たり存在たるものをして、具體的に非有の有、非存在の存在たらしめ、無即有否定即肯定の構造を有する個體たらしめる所の原理となるのである。従つて此様な絕對普遍がそれ自身を限定することにより直接に個物を發出するとは勿論いふことを許されない。普遍の特殊化が個となるといふことは斯かる意味であることは出來ない。絕對普遍も直接に自己を限定することにより個物を發出すべき存在の根源として存在の前

に豫想せられるものではあり得ない。それは却て其否定契機として種を含み種に媒介せられるのである。絶對普遍は矛盾の統一、否定と肯定との轉換的媒介、有と無との媒介的同一、の原理であるから、それのはたらく否定的地盤として非有的基體として自己否定的なる種を豫想しなければならぬ。而も自己否定的非有が豫想せられるとは、何ものも豫想せられないといふことであるから、絶對普遍は其絶對性を失ふことがない。自己否定的に動を湛へる力の緊張としての種が、その含む否定の二重的對立性を解放し、斯かる否定的對立の重疊として微分的なる力の張合ふ關係が自由に徹底せられて絶對の否定にまで展開せられる其極限に於て、その自己否定を絶對否定的肯定に轉ずるものが絶對普遍に外ならない。それであるから絶對普遍の否定即肯定なる絶對否定性は、種の自己否定の極限に於て之を肯定に轉ずる原理であつて、後者の媒介なくして單に自己の特殊化限定により個物を發出するものではないのである。斯かる無媒介の自己限定をなすものと考へられる限り、縱その絶對普遍が絶對無と稱せらるゝも、實はそれはなほ絶對有の意味を殘存せしめるのであつて、完全に絶對否定的媒介性を徹底せしめるものとはいはれない。ヘーゲルの普遍が猶絶對理念として有化せしめられる所以である。その特殊化といふものが眞に自己否定の矛盾的分裂性を徹底せしむる能はず、自己限定の發出性を完全に脱却することが出来なかつたのも、これに由來する。絶對普遍は絶對否定即肯定の原理であるから、それ自身の絶對否定の媒介として種の自己否定を要求

するのである。絶對普遍の絶對否定的統一性と種の自己否定的分裂性とは表裏相即する。プロライノスに於て展開せられた絶對的一者と、プラトンの質料との、否定的相即は正にこれに外ならない。後者の無限なる自己否定の動搖激動を基體として之を絶對否定の超越的統一に轉ずるのが前者の絶對統一性である。絶對的なる分裂動亂そのものを絶對の靜一に媒介して、種の根源の否定的轉換に由り個の否定即肯定的なる統一を發生せしめるのが絶對普遍である。其意味に於て個は普遍の特殊に媒介せられた成果と考へられるのである。それは決して普遍から直接に發出するのではなく、又種の特殊からそれを根源として直接に發生するのでもない。唯兩者の否定的媒介に由つて成立するのである。種が却て個の實現に相當するものを含む限り個を豫想すること既述の如くであるばかりではなくして、絶對普遍も種に由る否定を通して個に於ける肯定に達しなければ其はたつきを實現することは出来ないのである。種の自己否定が絶對普遍の絶對否定性に媒介せられて肯定に轉せられ、超越的全體の秩序が之を荷ふ個の發生に於て展開せられることに由り、斯かる個の發展的全體として絶對普遍が現實化せられるのでなければ、絶對普遍の普遍性は對自的に自覺せられない。而して個はそれに相當する契機としては既に種の自己否定の總體に含まれるのであるから、絶對普遍の現實化としての個の超越的全體は、種の自己否定の總體の、絶對否定的超越化に外ならない。これが前に述べた種に相對化せられない類である。類的種に外ならざる種的類と區別せられる

所の、絶對類ともいふべきものである。それに於ける種は飽迄否定契機であつて、分類的種ではない。従つて類は種に相對化せられることなく、たゞ自己疎外に由つて其絶對普遍性を失ふ時種に顛落する。それは併し同時に、個の自己喪失としての種化でもある。絶對類に於ける種と個との媒介的綜合を外にして絶對普遍の現實的存在は求め難い。ヘーゲルの概念と名けるものは斯かる絶對類に於ける普遍の實現に外なるまい。それはプラトン以來の希臘存在論に於ける形相の自覺態といふべきものであらう。而して形相は既にプラトンに於て善の絶對否定的統一が類化せられ現實化せられたものであつた。プロティノスに至つて理性に於ける類的客觀的側面と主觀的作用的側面との統一が絶對的一者に由つて可能にせられ、形相の表現性が一者の超越を存在と思惟とに媒介する關係は、甚だ明瞭にせられた。今絶對普遍と名けるものは斯かる絶對的一者としての善に相當し、絶對類といふものが理性の形相に相當することは多言を要すまい。併しプロティノスに於て一者が絶對否定の無であるよりは絶對有であることが、質料の自己否定的分裂的なるよりも寧ろ統一の缺乏不完全を意味するに對應し、従つて兩者の關係が依然たる美的形成の直接性を殘存せしめ、眞に否定即肯定の轉換媒介に達しないことは、希臘存在論の制限を示すものである。其結果個が十分に無即有の否定的統一たる意味を發揮する能はず、個を媒介とする種の絶對類化が藝術的形相に比せらるゝよりも寧ろ國家の絶對否定的統一に比せらるべきものなることが認められない。ヘーゲルに至

つて始めて斯かる直接態の殘存が否定的媒介に純化せられたのである。たゞ基督教の有神論がなほ絶對普遍を有化する傾向を有する爲めに、私の區別する絶對類の理念的統一と絶對普遍の絶對否定的統一とが、種の自己否定性を隔て、相對せしめらるゝことなく、直接に連續せしめらるゝ傾向を有する。其爲めに、概念の普遍性が絶體類的に種の否定的媒介を含み従つてそれ自身種の自己否定性を常に半面に豫想するものなることが見失はれ、單に特殊化的自己限定に由つて個が發出せらるゝ如き傾向を免れないのである。其限りなほプロテイノスの發出論的存在論を完全に脱却しないともいはれるであらう。それは畢竟種の自己否定的質料性を十分に媒介としない、辯證法の不徹底といふ外無い。國家の如き絶對類に止まるものが直接に神の地上實現と解せられるのも、種的質料の自己否定性が媒介としての意味を十分に認められて居ないからである。端的にいへばそれは、精神に對する物質の否定的媒介性が完全に重視せられない結果である。絶對類は絶對否定の實現として、否定媒介の活動を離れ個の動性と獨立に存在するものではない。それは半面に直ちに種の自己否定を含むが故に不斷の疎外に曝露せられ、たゞ絶對否定の動即靜としてのみ統一を保つのである。自己否定的種の絶對否定的肯定に轉せられ個の定立に發展する限りに於てのみ、それは個の動的全體として成立する。これを、絶對普遍が運動と對立とを越える靜的統一の原理なると同一視することは許されない。而も後者の靜は前者の動に於てのみ現實となり、動即靜を成すのである。類



が個の全體として個のもつ動性を自ら共有し、常に動いて已まない不斷の發展をなす、その發展の絶對的純動が即靜として絶對普遍の實現たるのである。それであるから、その不斷の運動の媒介たる種の自己否定を離れては類は考へられないと同時に、種の媒介なくしては絶對普遍も現實となることは出来ないのである。絶對普遍は類の動性を超える絶對統一といはれるけれども、それは類の動性を靜化し、その動性の媒介たる種の自己否定を排去して、類を絶對無にまで擴げた極限としての超越的全體といふ如きものではない。プロティノスに於ては質料の自己否定性の不完全なる爲めに、一者がなほ斯かる絶對存在の意味を含むこと曩に注意した如くであるが、同じ理由により理性が否定疎外の原理たる質料を所謂理性的質料として全く自己に内化する結果、その否定的動性が十分に原理附けられなかつた。併し種の自己否定性を媒介とする類は飽くまでも動性を保ち、それを固定することを許さない。此動性を超越することは動を否定し種の媒介を排去して所謂包越的に之を包むことに由つて達せられるのではない。絶對普遍の統一は斯かる包越的全體として靜的に存在する限り、縦絶對無と呼ばれてもそれは絶對有に外ならないのである。プロティノスの一者は斯かる傾向を免れなかつた。併し動性は動性を直接に否定することに由つて超えられるのでなく、却てそれを徹底して純動たるに至つて動即靜として超越せられるのである。絶對普遍は此様な意味に於て絶對類を超越し、後者の自己否定的種を媒介とする動性を否定するといはれる。併しその否定は肯定

に於ける否定であり、却てその自己肯定はその否定するものに由る否定を媒介とするのである。即ち超越は内在と媒介せられ、靜は動と相即するのである。此媒介を離れて其外に超越的に自存するものはない。それだからこそ、絶對普遍は絶對無と呼ばれ得るのである。類の動即靜に於ける靜的統一を外にし、類の種に由る否定の絶對否定即肯定に於ける肯定を外にして、絶對普遍の超越的絶對性は求められない。類は相對的に種とならぬといふ意味に於て絶對類と呼ばれ、直接的にして相對的なる種類(類的種)と區別せられるとしても、疎外に由る種化に斷えず曝露せられ、絶對否定態に於て個の動性と伴ひ不斷の運動をなすものである。それが種でなく種を超える類であるといはれても、その超越は種を直接に否定して之を類化することではなくして、(斯かる類化は實は種類的範圍を越えることは出来ぬ、従つてまた種を否定するものでもないのである)、却て種を肯定しその自己否定性を徹底して之を絶對否定に轉じ、以て種を肯定的に否定することに於て之を超えるのである。斯かる自己否定的種の媒介に由る絶對の動が即靜として絶對普遍の意味を實現する。此純動即靜のみ絶對無といはれるのである。それは絶對にして相對と相即し、相對の自己否定の絶對否定面に相當する。之を否定面といひ無の場所といふも、同時にそれは面の否定であり場所の無でなければならぬ。即ち、否定即肯定、無即有、としてのみ思惟せられる。絶對無は自己否定を媒介とする絶對否定の外に、後者の轉換媒介を離れて自存するのではない。若しさうであつたならば絶對無

も無でなく有に化する。併し又絶對否定はたゞ單獨なる個の活動に成立するのでもない。前に述べた如くに個を種の直接的否定者と思惟した私の舊説は、此點に於ても誤を免れなかつた。個が種の交互的否定を媒介として類の綜合に達するその否定即肯定の活動を以て、絶對否定を實現するものと考へたのは、個の種に於ける自己の否定が自己を否定する直接の活動として却て自己を肯定する結果に陥り、個は自己否定に於て實は自己肯定をなすといふ矛盾を犯すことを免れないのを忘れた結果である。従つて個の否定即肯定といふものも、實はその要求する如くに絶對否定たること能はず、所謂絶對否定と考へたものも終始個の肯定を含むといふ矛盾に陥つて居た。今や個を以て直接に種を否定するものとする思想を清算し、之を種の自己否定に媒介せられた無即有なる動的存在とし、不斷に運動する否定的存在とするに伴ひ、絶對否定は斯かる否定的存在の否定即肯定の原理として絶對普遍の媒介的側面となり、個に屬するものでなく却て個を否定するもの、その否定に於て之を肯定することに由り、始めてそれを存在せしめるものとなる。其肯定の原理が絶對普遍である。絶對普遍は絶對否定の靜的統一面に外ならない。絶對も媒介を含むが故に動靜の二面を有する。絶對否定は其動的側面であり、絶對普遍は其靜的側面である。斯かる動靜二面の統一として絶對は必然に相對的なる個の否定的存在と相即し、種の自己否定を其否定契機とするのである。(未完)